



## 彼女の逸話

---

あなたは、こんな話、信じてくれるだろうか。

それはこんな話だ。

その日私は、仕事帰りで酷く疲れていた。早く家に帰って、ベッドに倒れ込みそのまま朝まで何も考えずに眠りたかった。重い足を引きずりながら、アスファルトに靴底が擦られる音を耳にしながら、それを遠くに感じていた。

ふと、背後に気配を感じた。殺気ではなく、何だか温かいような切ないような懐かしさを感じた。振り返ると、ただ街灯に照らしだされるアスファルトが見えるだけだった。電柱の陰に何かいるそんな気がしたが、別に害になるようなものではないと思ったし、とにかく疲れていた。

だからそれが何であるのか、私は確かめる気力もなく、また家へと続く道を歩き出した。さっきよりも、気配は私に近づいている。来るなら家までついてくればいい。そう思いながら、足を速めた。

化粧を落とすこともせず、ベッドに倒れ込む。瞼が重い。何かに抑えつけられているように、感じながら目を瞑った。先程感じた気配は、私のすぐそばにいた。けれどどんなものなのかは、よく分からない。幽霊や宇宙人なんて信じないし、見たこともない。ただ、いるとするならばどんなものだろうかと、想像して楽しむことはあった。

私の傍にいたその気配だけのものが、私の中にするりと入ってくるのが分かった。懐かしさと、胸をぎゅっと締めつけるような痛みを感じたからだ。瞼が重く、私はどんどんと夢の世界へと入り込んでいった。

目を開くと、先程まで歩いていたはずの駅からアパートまでの道に立っていた。頬をつねると感覚がない。夢の中で、さっきまでいた現実世界に居るなんて、何だか妙な感じがした。薄暗い道に、ぽつぽつと街灯の明かりが夜道をぼんやりと照らす。道沿いに建つ家々は、明かりを窓から振りまき、私のことを受け入れも拒みもせずそこにある。

立っていても埒があかないので、のろのろと歩きだす。ふいに、背後に嫌な感触がして振り返ると、電柱の脇にゆらゆらとした人影があることに気づいた。近づいてみると、人の輪郭がはっきりしてきた。それは少女だった。それも私が良く知っている人。

それは、幼い頃の友だった。彼女とは、小学生の時に仲良くなり、中学に入る頃に疎遠になった。原因は、私が彼女に嫌悪感を抱いたから。それは、憎悪にもなった。

彼女は、私が持っているものを酷く欲しがらる癖があった。時折、お気に入りのペンがなくなると、彼女が持っていることに気づいた。盗ったかとを彼女に問いかけても、知らないと言うだけだった。大切な物を盗られても、親には言い出しにくく、結局、人気キャラクターのついた文房具を買うのを止め、地味な物を使うことにした。それからは、物を盗ることはしなかったけれど、彼女は私の仕草などをマネした。その頃から、彼女のことを疎ましく思い、別の友達を作った。幸い、彼女と同じクラスになったのが、二度だけ。話しかけられても、曖昧に返事して、別の友

達と行動していたから、そのうち私に話しかけてこなくなった。けれど、時々、物がなくなったりマネされたりすることはあった。

その後、彼女と関わりを持ちたくない、完全に無視したりするようになったのは、私が初めて好きになった人を奪われた時だ。誰から聞いたのか、私が告白しようとしたバレエインテナーで、先に告白し彼の心を奪っていった。

最初は、私と、同じ人を好きになったのだと思って、諦めた。けれど、私が好きになる人に彼女は必ず告白し、何週間もしないうちに別れた。彼女は、色白で目がぱっちりとして大きく、フランス人形のように綺麗な顔をしていた。偶然が重なった時、私は苛立ち彼女を呼び出し、事情を聞いた。

「あなたが私にしたように、あなたが大事に思うものを奪ってやりたいの」

綺麗な顔が、醜く歪んでいくのを吐き気を堪えて、睨みつけ続けた。彼女は、あははっと、甲高い笑い声をたてながら勝ち誇ったように私を見ていた。それ以来、疎遠になった。

けれど夢の中で再会した彼女は、様子が違う。あのぱっちりとした目は、ただの空洞でぽっかりと穴が空いている。その穴は、黒々としていて、不気味な闇に包まれていた。時折開いた口からは、寂しいのと言ひ、それを繰り返すばかりだ。私はふいに、とても切なくなった。彼女が私にしたことは、許されないこともある。けれど、取るに足りないことだったのだ。今なら分かる。私もきっと、何か間違っていたんだと。すれ違ったまま、互いを理解し合うことが出来なかったのだと。

ごめんね、私、あなたのこと、理解してあげられなくて……。ごめんね、と私が繰り返すたび、彼女は、少しずつ大きくなっていく。見下ろす彼女が、私の方へ倒れ込んでくる。目を瞑ると、辺りが真っ暗になった。

数回瞬きしていると、辺りがうっすら明るくなる。振り返っても、彼女の姿はなかった。ため息をついて、歩き出す。急に、背筋を走りぬける悪寒を感じた。

視線の先に、二年前、事故で亡くなった父親がいた。父は、風が吹いたら飛ばされそうなくらい、紙のように薄くなっている。近づいて、父をじっと見ていると、朝まで元気に笑っていた父親が、病院のベッドでいろんなチューブやら機械に繋がれ、針を刺された腕に赤黒い斑点が浮かんでいる。そんな目を背けたくなるような酷い光景が、目の前をものすごいスピードで駆け巡っていった。

交通事故にあい、こん睡状態から目覚めることなく、父は亡くなった。がっちりとした体は、どんどん筋肉を失いうすっぺらくなっていった。私は、こんなのは父ではないと、その姿を見ながら強く思った。他の家族のように、手を握って話しかけることなど出来なかった。母親に、手を無理やり握らされた時、かさついた妙にひんやりとした手に触れ、気持ち悪いと感じた。こんなのは、人の手の感触ではないと、思った。

父が亡くなったベッドで、家族が泣くなかで、私は涙を流すことはなかった。こんな父じゃない、父はきっと遠くへ行っていて、そのうちいつもの笑顔を見せて帰ってくるのだから。家族は何で、こんな知らない人の姿を見て泣くのか、私には理解できなかった。

目の前にいるうすっぺらい父が、私にそっと手を差し伸べた。しばらく迷って、私は、その手に触れた。何だか胸の辺りが温かくなり優しい気持ちになった。そして、父は、ありがとうと言って消えていった。

ポツンと街灯の下に取り残された私は、急に、物すごく大事な物がこの手から消えていったようで、悲しくなった。わーっと声をあげて、泣きだすとどんどん大事な物の記憶が、私の中に、ゆっくりと刻まれていくのを感じた。

どのくらいの時間、私は泣いていただろう。鼻をすすりながら歩き出す。この道は一体どのくらい続いているのだろうか。私が今まで、出会ってきた人達との再会する道。でも、どれもが私が拒んできた大切な人達との再会。亡くなる時に、走馬灯のようにいろんなことを思い出すと言うけど、それと似たようなことを私はしているのだろうか。

そうなのだとしたら、私は死にかけているのだろうか。ベッドに倒れ込んだはずの私は、本当は、どこかで死にかかっているのだろうか。けれど、これが終わらない夢なのか、現実世界なのか、もはやどうでもよくなってくる。

この状態がいったい何なのか、そのことに気づくことが出来たら、この長い夢も覚めたりするのだろうか。そもそも死んでいるのなら、夢ではない。けれど、現実かどうかはよく分からない。ベッドに倒れたあの記憶すらも、今は疑わしく思えてくる。でも、私は何故ずっとここにいるのだろうか。ここは、私にとって大切な何かがある場所なのだろうか。この夜道に、現実で私は大切な何かを置き去りにしていったのかもしれない。

そんなことを考えながら、薄暗い道を私は歩いていく。今度は誰に会えるのだろうか、そんなことを楽しみにしながら、薄暗い道に目を凝らす。その大切な何か、やあ、待っていたよ、と親しげに現れるのを待っているように。

「先生、バイタルは正常です」

白衣を着た先生と呼ばれた人は、白衣の上にカーディガンを羽織った女性に、重々しく頷いて、手にしているカルテにサラサラと何か書きこんでいく。壁にあるモニターには、グラフのようなものや、いろんな情報が映し出されている。先程まで、彼女が見ていた夢が映像としてそのモニターに、同じ場面が繰り返し再生されている。ピツピツと機械が、リズムカルに音をたてている。ベッドには、とても顔の綺麗な女性が、機械に繋がれ眠っている。

「先生、この患者さんは、どのような治療をしているのですか」

女性に聞かれ、再び、カルテに目を落としていた先生と呼ばれた男性が、重々しく頷いて、うむと、息をのむ。

「この女性は、昔、すべてをマネしたいと願った女性につきまとい、命を奪ってまで、その人になろうとしたんだ。だが、どうしても、父親とそのマネしたかった女性との関係や感情が理解できないんだ。顔を変え、家族に接近し、大好きな女性の父親の死と、この女性は直面した。しかし、本人は存在しないのだから、マネることが出来ない。この人は、マネることで、生きている実感を得ていたのかもしれない」

先生は、壁のモニターを見つめて、あるグラフを指差す。

「君、見たまえ、このグラフのこの部分、何度も似たような場面が少しづつ形を変えて繰り返し再生している。この波形がいつも乱れるのは、精神的にもひどく動揺し、混乱し、心を乱されているからだ。この部分を分析出来れば、治療にも役立つ。彼女が何故あんな事件を起こし、逃走し続けていたのか分かるのだよ。警察にも、早く報告出来るようにしたいのだが、この映像だけでは、中々要領を得ない。だが、きっとこの夜道に彼女にとって重要な何かがあると、思うのだが。もしかしたら彼女はこの夜道で……」

いや、どうだろう、まったく謎ばかりだ。彼女は、本当に死に立ち会ったのかも定かではないし……と呟き、首を振っている先生の姿が、私には目にしなくても分かる。そして、また同じ夢に戻る。こんな実験、私は今すぐにでも終わらせることが出来る。必要な情報くらいいつだって与えられる。でもそんなこと私はしない。だって、この現実には、居ないもの、彼女が。彼女のいない現実に戻るくらいなら、私は彼女になって、何度もこの夢をやり直す。彼女の気持ちをすべて理解するまで。私が私でなくなり、彼女になれるまで。

街灯のぼつりぼつりとした薄暗い道。あなたは、まだ歩いているのかしら、それとも電柱に寄りかかるように立っているのかしら。そして、あの時と同じようにするかしら。

ぼんやりと浮かび上がる影のようなものが、形作るのを私は、嬉しさを押し殺して待ち続ける。

あなたは、信じてくれるだろうか。こんな話。私が、とても大好きで、どうしてもその大切な人になりたくて、その人になってしまったそんな夢のような話を。